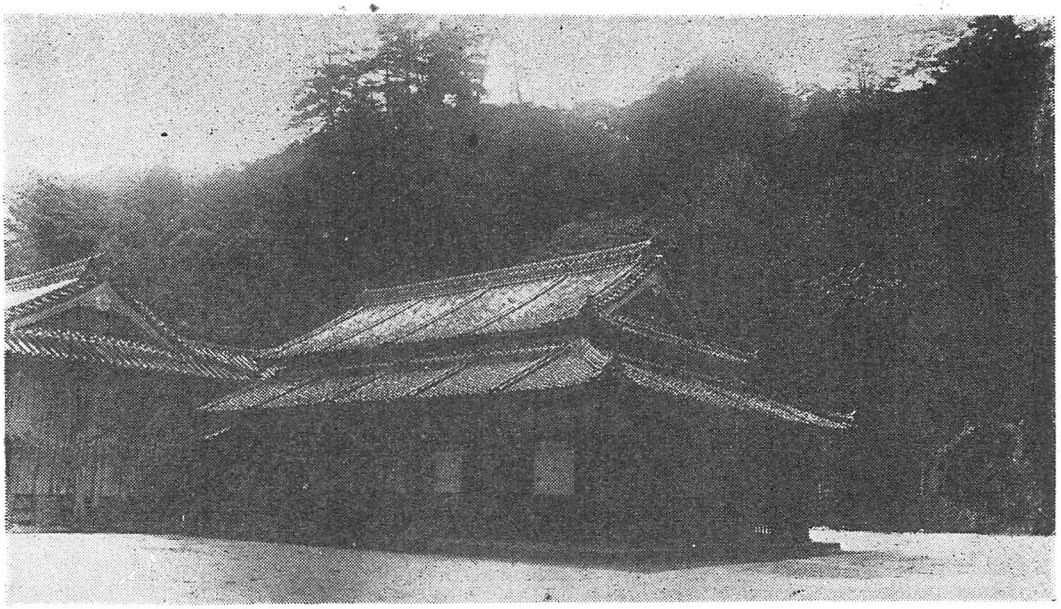
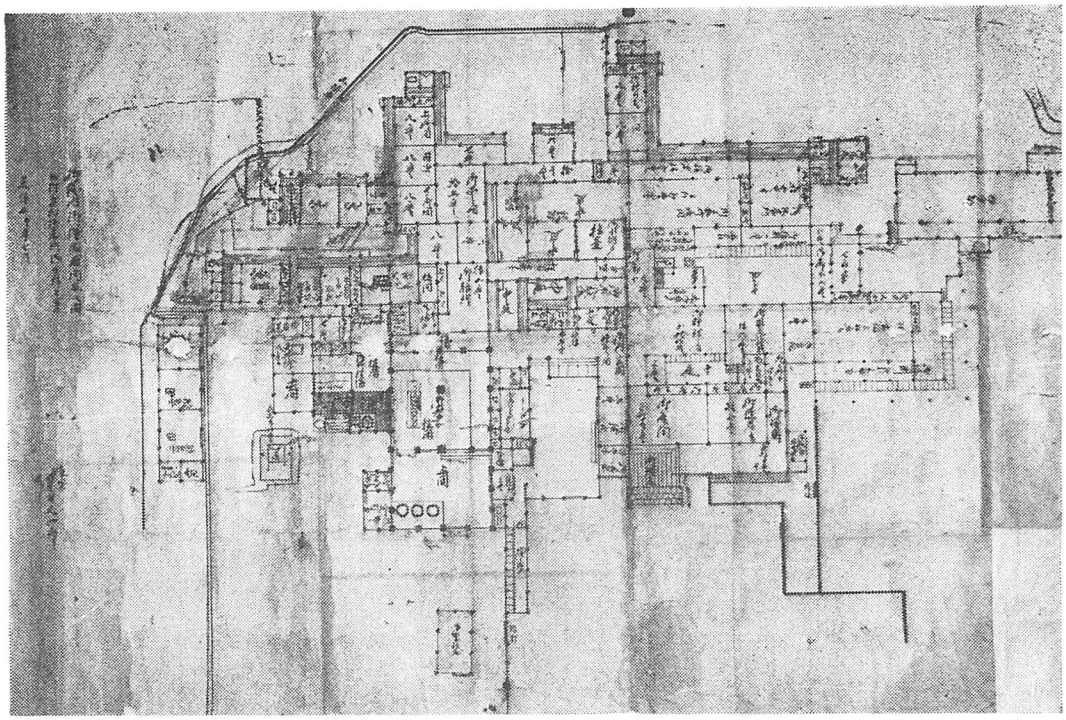
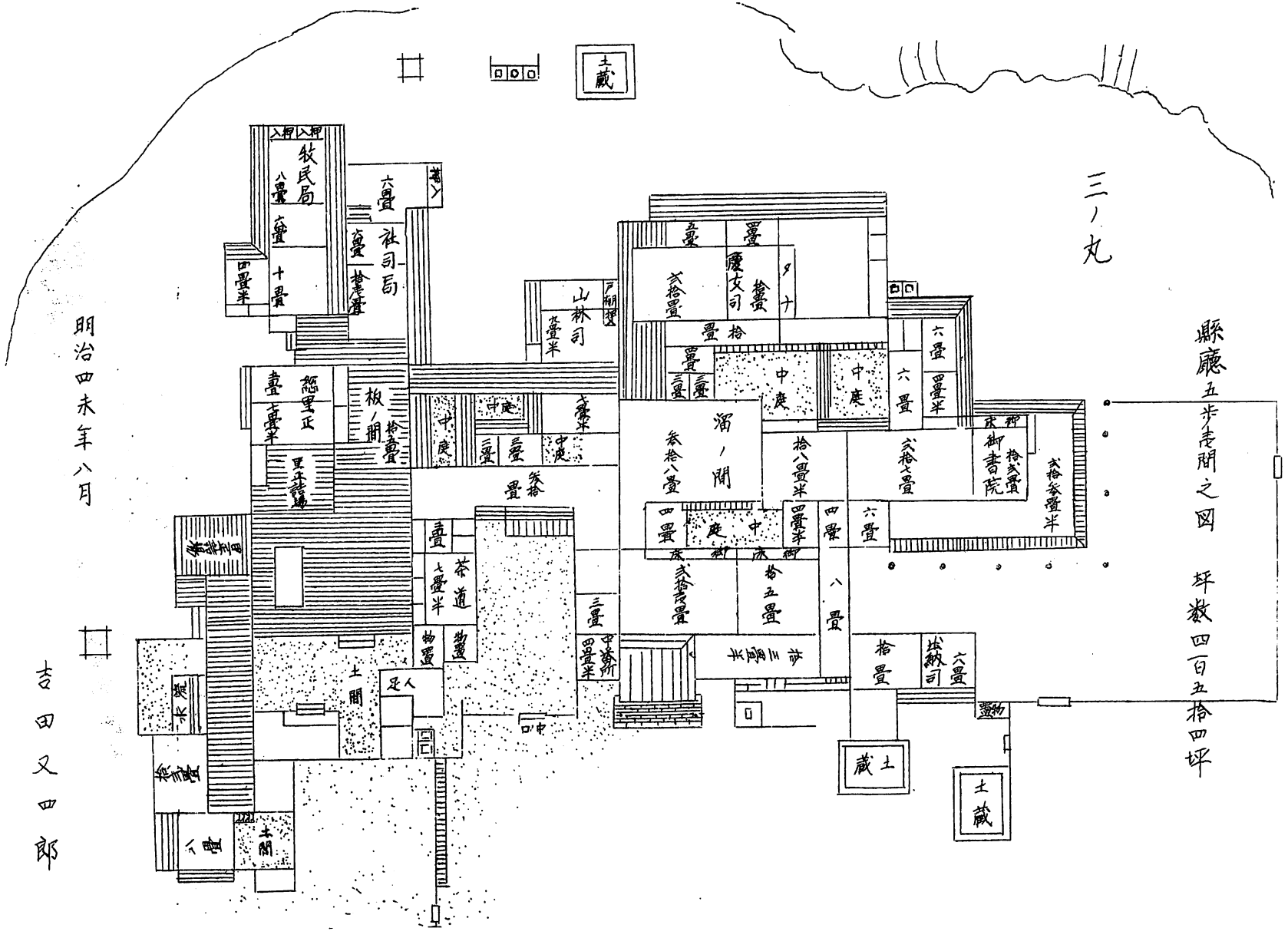


豊後佐伯城三ノ丸御書院古写真（明治年間）

左手の建物は昭和45年迄残されていたが、佐伯文化会館建設のため取壊されて、市内に住吉御殿として移築現存する。



天保五年　三ノ丸御殿古図　（吉田家伝来所蔵）


縣廳五歩壱間之図
坪数四百五拾四坪
三ノ丸
明治四未年八月
吉田又四郎
土蔵
牧民局
祇司局
山林司
溜ノ間
中庭
御書院
茶道
土間
足人
物置
中湯所
川船所
納戸
勘定所
御床
御縁
六畳
八畳
十畳
四畳半
拾畳
拾五畳
拾八畳半
拾六畳
拾四畳
拾二畳
拾畳
弐拾畳
弐拾八畳
弐拾六畳
弐拾畳半
拾弐畳
拾六畳半
拾四畳半
拾弐畳半
拾畳半
弐畳
三畳
四畳
六畳半
七畳半
八畳半
板ノ間
総里正
里正詰場
馬屋
牛小屋
馬小屋
人足
土間

研究

佐伯城絵図解説 八（最終会）

明治四年の佐伯県の庁舎

会員　小野英治

本図は、明治四年佐伯県当時の、珍らしい県庁舎（三の丸御殿）の平面図です。

原図は、たて五四・五cm、よこ八〇・五cmで、吉田家に伝来所蔵するものを、適当に縮図しています。（なお原図には柱など描くも、ここでは省略して掲げた。）

さて、佐伯県とは、明治四年七月一日の廃藩置県によって生じた県ですが、同年十一月には大分県に統一されたために、四ヶ月という短期間存在したに過ぎませんが、当時の佐伯県庁舎を知る上では、貴重な資料です。

この図を見る上で、先づ「佐伯史談」八十八号に掲載の、三ノ丸御殿平面図（天保五年）、及び別掲の古図写真、同明治末期撮影の御書院の古写真など併用していただければ、間取の変化、部屋名の変化など、興味ある点を多々見出すのではないかと思います。

先べ、気付かれるのは、天保五年図と比較して、奥向の長局等が消滅している反面、建増した部屋や土蔵などが見受けられ、かつ、牧民司、社寺司、山林司、里正寺珍らしい名が記入されているのが注目されます。

江戸時代、大名の居城として造営された三ノ丸御殿も、佐伯県庁舎として使用するに際して、種々改造されたことがよく理解出来ます。

明治二年版籍奉還後、藩知事となった旧領主は、同四年七月廃藩置県と同時に東京に移され、華族に列して、後の佐伯県時代は、新政府から知事の任命はついになく、その代理として、大参事が職務を代行していました。

なお、明治二年版籍奉還後の新職制として、藩知事のもとに、大参事・権大参事・少参事、大属、宣教掛、権大属、少属、権少属、史生、使部等の役くがおかれていましたが、特に大参事は、従来の家老以下の職制を廃し、中央明治新政府と連絡をとって、藩政改革を推進する役割を果しており、西郷隆盛の薩摩藩大参事は有名です。

廃藩置県にともない、明治四年十月には、大参事、権大参事が廃され、正・副参事がおかれ、県令（権令）の補佐となりました。

たまたま、先般秋山家（秋山医院）所蔵になる、明治四年八月に書かれた『士族卒禄高取調帳』辛未八月佐伯県を借用したが、それによると、佐伯県の職員は次の様になっています。

大参事	西名幾作	（元高二〇〇石	三二一石）
権大参事	山口啓佑	（〃　八〇石	二二石）
〃	黒水常	（〃　五〇石	二二石）
少参事	古賀直衛	（〃　一〇〇石	二二石）
〃	朔石敬磨	（〃　六〇石	二〇石）
大属	中根左司馬	（〃　七〇石	二〇石）
〃	関谷侃	（〃　五〇石	二〇石）
〃	小林隆吉	（〃　二〇〇石	二二石）

大　属　袋野直記（三高　七〇石－二〇石）

権大属

古川策馬（一〇〇石－二二石）　脇田嘉一郎（一五〇石－二〇石）

山名勇記（六〇石－二〇石）　高瀬雪江（五〇石－二〇石）

佐久間　衛（二〇〇石－三二石）　遠城寺評衛（六〇石－二〇石）

谷　萬年（十人扶持－一七石）　梅　豹蔵（一〇人扶持－一七石）

片岡丈助（三人扶持－一七石）　緒方大年（三人扶持－一七石）

少　属

梅田敬止（三人扶持－一三石九斗）　小田部伺作（三人扶持－一三石九斗）

黒木周蔵（三人扶持－一三石九斗）　渡川成人（三人扶持－一三石九斗）

須田益戈（三人扶持－一三石九斗）　山本太郎（三人扶持－一三石九斗）

浅田恭平（三人扶持－一三石九斗）　今川左助（三人扶持－一五石三斗）

安藤平佑（三人扶持－一五石三斗）　黒木貫鐵（三人扶持－一三石九斗）

権少属

小寺藩士（八石三人扶持－一二石三斗）　関　青士（八石三人扶持－一二石三斗）

堺田兵助（〃　一二石三斗）　渡辺吉右エ門（〃　一二石三斗）

佐藤為吉右エ門（〃　一二石三斗）　今井幹之進（〃　一二石三斗）

吉垣久助（〃　一二石三斗）　井澤　半（〃　一二石三斗）

岩崎伝一（〃　一二石三斗）　安永脩一郎（〃　一二石三斗）

片岡祖助（〃　一二石三斗）　関　準平（〃　一二石三斗）

小寺素一（一人扶持－三石九斗）　山口詠造（〃　一二石三斗）

白井峻介（三人扶持－三斗）（兵員以下（つづく）省略）

とあって、あえて旧藩制による従来の役職にこだわることなく、軽輩の中から大いに新しい人材を登用したことがわかって、面白いと思います。

（おわり）

（下段よりつづく）

ちようど船頭所川とか長島川などの呼び方があるように。矢野龍渓の号も、当然汪洋（ひろくひろがるさま）たる龍渓によつたものである。

（以上）

小言

龍渓について

（月柴生）

先月十五日本会主催の最初のサイクリングで立ち寄った長瀬の東方庵について、今月の市報は、写真入りで紹介して下さっている。

ところが、早速二三の方々から「矢野龍渓の碑」について問い合せがあったので、私なりに解釈すればこうである。

東方庵の紹介はいいが、この碑は矢野龍渓の碑ではなく、寺の上方の渓谷を、先年「龍渓」と名付けたそのことがあり、矢野龍渓の号のことにもふれているが、この碑は人物の碑でなく、渓谷の碑である。このことをまずはっきりしておきたい。

旧藩時代、詩人たちから愛称されていた龍渓は、実はこんな狭くるしい所でなくて、番正川が龍護寺付近を流れるあたりで、「龍川」または「龍渓」と呼ばれていた。

先ず中島子玉に「龍川舟遊八首」の長篇が有名。子玉の師広瀬淡窓は、少年の頃幼学の師松下筑陰に随って船でここに遊び、「羽明山下水初メテ波ダチ、龍護寺河畔棹ヲ移シテ過グ……」と詠じ、このあたりやや渓流であったことがわかる。

また秋月橘門に「春雨霽チ晴レテ舟ヲ龍渓ニ浮カブ」という題で、新緑の龍護寺に詣でた七言詩があり、また別に「雛八（旧暦十二月八日）東方庵ヲ訪ト（その後で）龍渓ヲ渡ツテ（龍護寺に）梅ヲ看ル」と題して、

「帰路龍渓ヲ過グ……矮梅未ダ笑ヲ解カズ……」云々の五言詩を、その詩集「橘門韻語」にのこしている。

つまり明らかに、龍渓は長瀬部落のせま苦しい谷間ではなく、船に棹さして遊び楽しめる川である。龍護寺付近の、番正川本流の部分名称が龍川であり、龍渓である。

（上につづく）